

---

# クリスマスナイトショー2010

MMR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマスナイトショウ2010

### 【Nコード】

N3732P

### 【作者名】

MMR

### 【あらすじ】

クリスマスの夜だけの特別ラジオ番組、クリスマス・ナイトショウ。2010年に起こったエピソードを聞いて、その話にまつわるプレゼントを差し上げています。

## ブロック1（前書き）

お初の方はあまりおススメできない内容になってしまっていること  
をご了承ください（お約束）

## ブロック1

「みおみおと！」

「る……るりるりの！」

「「クリスマスナイトショーウ！」」

「みなさんこんばんは！ クリスマス・ナイトショーウにようこそ！  
わたしが本日メインMCを務めさせていただきます、みおみおと  
！」

「あの……るりるりですっ！ ねえみおちゃん、この名前恥ずかしいよ……」

「もう、みおみおだってばー！ ラジオなんだからやっぱりラジオ  
ネームっていうのかな、普段と違う名前でいこー」

「うう……そもそも名前を繰り返してるだけだし……」

「恥ずかしがり屋さんのるりるりちゃんはずつ慣れてもらうと  
して、クリスマスナイトショーウ、今回はじめてです！ って人に簡  
単に説明しちゃうね！」

「はう、先に進められちゃったよお……」

「この時間は、普段は近くにある大学の人たちが制作してお届けし  
ているんだけど、クリスマスの今夜だけは特別！ さっきわたした  
ちがタイトルコールしたけど、クリスマス・ナイトショーウと題して、

みんなのステキなお話を聞いちゃいたいと思います！」

「それで、その……わたしたちの独断になってしまいますけど、いいお話だと認定した時はささやかながらプレゼントを……」

「ちよつとるりり、言葉がかたいよ！ クリスマスなんだから二人がらぶらぶになれるようにお手伝いするんだよ！」

「えっ！ らぶらぶ！？」

「そうだよー？ るりりもせっかくだからDJじゃなくてゲストで参加してみるー？」

「わ、わたしはいいよお……」

「えへへ、というわけでさっそくるりりファンになったあなた！ 残念だけど、彼女はもうすでに大好きな人がいるので狙っても無駄だよー？」

「はうう、私の話はもういいよ……そもそもどうして、ここに連れてこられたのかもわからないし、いきなり台本渡されても何していいかわからないよ……」

「あっ、そうそう！ このクリスマスナイトSHOWは、本当は担当するのがDJコウさんはずなんだけどね、去年も聞いていた人は知っていると思うけど、ついにDJコウさんにも彼女さんができたんだよ！ だから彼女さんと少しでも近いところにいたいからって裏方に回ってもらってまーす！」

「あ、あの人ですか……？ なんだか、彼女さんをひざに乗せてい

るように見えるんですけど……」

「強気な彼女さんだったみたいなんだけど、一年経ってすっかりらぶらぶモードみたいです！ うらやましいなー」

「う、うらやましいのかな……なんだか周りのスタッフさんたちの視線が……うんざりしているように見える気がするんですけど……」

「だいじょうぶだよ、そんな視線もだんだん快感になってくるんだから！」

「そ、それもどうかと思いますけど」

「えっと、それでね！ DJコウさんの代わりを探していたからわたしに応募したら受かったちゃったんだ、えへへ」

「みおちゃ……みおみおが受かっただけなら私は関係ないのに……」

「お友達連れてきていい？ って言ったらOKって言ってくれたんだよ！」

「そ、そんな適当でいいのかな」

「いいのいいの。あ、オープニングトークはこのくらいにしておいて……それじゃクリスマスナイトショウ、いよいよはじまりまーす！  
いったんCMです！」

## ブロック1（後書き）

ブロック1は、

シスターアタック／ダブルアタック！（N2963J／N8801

J）

でお送りしました。

## ブロック2

「D・J・コウの！ クリスマスナイトショー！」

この番組は、食事もウエイトレスさんも質と量たっぷりでお届け！  
ファミリーレストランフェアリードレスでお送りしております。

……ええ、なんでCM開けたらお前がいるんだガツカリだよという  
のはもつともですが……まあ一応説明しますと、なかなかお二人が  
本題に入ってくれないとのことで、急遽変われと言われまして。私  
だって今日はこんなつもりじゃなかったんですよ、できるだけ彼女  
のそばにいたかつ……

あつとすみません、スタッフからお前も進んでねえじゃねえかコラ  
という視線が飛んできたので先に行きます。ほんの一言だけグチっ  
ただけでこの扱い……男は辛いものです。はいはい、やりますから  
その刺すような視線をやめてください。では最初の方、呼びしま  
しょう。こんばんは」

「こんばんは」

「お、さわやかそうな青年ですね。隣にちょっと気の強そうな女性  
がいらっしゃいますが、カップルなんでしょうか。何か悩みでも？」

「ええ。あの、時々彼女が何を言っているのかわからなくなるとき  
があります」

「ほう、どういう風にですか」

「いや、なんとも表現しにくいというか。最初は意を決してラブレ  
ターを渡した時ですかね。ボロクソ言われたんですけど、それもな  
んだか無理矢理作った言葉な感じで。しかも、一応その言葉を聞く



限りフラれたんだなと思っていたのに今こうして一緒にいられている意味も分からないんですよ」

「あなたがアプローチをかけると、よくわからない返事をされる。でもなぜか彼女はあなたのそばにいます」と

「そういうことです。どうにかなりませんか」

「うーむ、とりあえず彼女の内心がどうなのか分からないと、どうにも答えようがないわけですが……そうですね、まずは私が聞いたらどう答えるか試してみようか。あの、彼のことがどう思っていますか」

「わたしをもっとその気にさせないといけないと思います。これならいっそのこと大嫌いって言われた方が下手に好意を持たれるよりマシです。だってそんなに彼は格好よくないし、とてもそりが合うようには思えません。こうして一緒にいる時も、スカートのすそを踏んづけたって気づきもしないし。こんなきそもできていないのに、告白をしようとするなんて無謀にもほどがあります！その前に考えなきゃいけないことがたくさんあるでしょ？」

「……なるほどさっぱりわかりません」

「ですよ。いつも最後に考えてから出直せだとか……言われっぱなしです」

「確かに大変ですね。『その前に考えなきゃいけないことがある』ですか、逆に言えばそれを解決できたらいいんじゃないですかね」

「それができたら苦労しないですよ」

「まあ、確かにそうですね。その前につてのが何を指しているのかわからないと……その前に……『そ』の前……ん？　ははあ、なるほど」

「何か解決策が思い浮かんだんですか？」

「いやいや……結論から言うそうですね、何も問題ないです。このまま一緒にいてあげてください」

「え、なんですか急に！　なんの根拠が」

「はは、彼女が嫌そうな顔をしているのでここで言うのはやめておきます。じゃあ最後は彼女に」

「な、なんですか」

「いつその気になるかはわからないけど、見たそのままの彼を大事にして、いいタイミングで握手をかわそうか。来るその時はあるから。もうすぐ正月だし、おとそでも飲みながらいそいそしたりさ。いいなその前にたっぷり考えてから実行するんだぞ」

「うう、あなたまで言っている意味が分からなくなりました。自分がおかしいんでしょうか」

「はは、彼にはやっぱり伝わっていませんか。というか今作ったので私もかなり苦しい感じがします。でも、彼女には伝わったみたいですよ？　というわけで、今回はどちらかというと彼女に、になってしまいますかね。エールをプレゼントいたしました。余計なこと言うな、と彼女ににらまれた気がしますが、彼に嫌われない程度に」

おさえてくださいね。では、次の方お呼びしましょう」

「よう！ 今年はヘマなくやってるか？」

「おお、ハルか。久しぶりだな、元気してるか……っと、すみません。リスナーの方を置いてきぼりにしてしまい失礼しました。この方は私の知り合いでして……まあそんな個人的なことは省略しましょう。ところで……ハルにはそれはそれは仲のよしいアキという相方がいらっしゃるはずなんですが、どうしました？」

「アキは確かにいるっちゃいるが、いつもセットで動いてるみたいな表現すんな、しかもラジオで何言いやがる」

「事実だろうが。しかもクリスマスだったのにそんなこと言いやがって……お前らしい加減くっつけよ」

「けっ、彼女持ちが余裕ぶっこきやがって。DJ口調がぶっ壊れて素が出てるぞ。それに知ってるだろお前も。それとなく伝えても全然いい返事が返ってこないんだぞ」

「冗談っぽくしているお前が悪いんだよバカ。はあ……わかった、とりあえずアキ連れてこい」

「わーったよ。おーい、アキ！」

「バカ！ 大声で呼ばないでよ恥ずかしい」

「さて、アキさんにもお越しいただいたところでちょっとハルと話を……今年お前と二人で海にバイク転がしに行っただろ、それで思い出したんだけど夏が暑かったな」

「急にどうした。まあ、思い出すまでもなく今年は夏が暑かったな」

「そのまま過ごしてたらあつと言う間に夜になって、今度は明かりがきれいだったな。しばらく忘れられないな」

「ああ、まあな。キラキラしてて、脳裏に残るくらいだったな」

「……ナツって誰よ」

「……は？」

「ナツがアツかったとか、男二人でナンパ？ アカリが綺麗だった？  
何よそれ、一日で二人もなんて信じらんない」

「え……いやいやいや！ 今年の夏が暑かったことだし、明かりつてのは夜景が綺麗だったって意味だし！」

「ふーん、どーだか」

「勘違いするなって！ ちょっと考えればわかることだろ、というかそんな考えになるなんてひねくれてるぞ」

「……私にも同じようなことしたくせに」

「くっ……あ、あれは違うだろ、ああやって緊張をほぐしながらも俺の気持ちをだな」

「じゃあ今度はちゃんとストレートに言えば？ そうすれば私もひねくれた考えしないであげるけど？」

「なんだよそれ、つーかおいそこのDJ、ニヤニヤすんな」

「お互い素直になれないのってほえましくてね。ハルのマネしてみた甲斐があったかなと」

「てめえ、ハメやがったな」

「さあ、なんのことやら。彼女さんが勝手に解釈しただけでは？」

「だからまだ彼女じゃねえっつーの！」

「ははは、というわけでハルには『まだ』彼女じゃない人へアタックできるチャンスを差し上げました。そこに誰にも邪魔されない別室があるので思う存分どうぞ」

「うるせえ、余計なことすんな！ 急にDJ口調に戻るな！」

「そう言いつつ別室へ向かっていくのを見ると、ますますほえましいぞこのヤロウ。さて、ここで一旦CMです」

## ブロック2（後書き）

ブロック2は、

言葉に秘める想い（N7311M）

秋の香り（N0946O）

でお送りしました。

### ブロック3

「D・J・コウのクリスマスナイトショー！ さきほどのハルとアキさんですが、やはり文句を言い合っているというか、状況は変わっていないようですね……まあ、いつものことなんでほっとしましよう。」

では、気を取り直して。次の方、どうぞ」

「……こんばんは」

「……………」

「あの、すみません？」

「……はっ！ あ、失礼。思わず見とれてしまいました。いや、なんとというか服装がキラキラしていて……凄いお嬢様が来てしまった感じです。あの、お名前聞かせていただいてよろしいでしょうか」

「あ、はい。薪口と申します」

「薪口さん……って、なんだかどこかで見たようなお名前のような気がします……えっと、まさかとは思いますが、住宅街のど真ん中の、まるで要塞のごとく構えている家の方では……」

「そ、そうかもしれないです。すみません」

「いや、謝ることではないですが……そうですか、やはり私の見る目に狂いはなかったようです。さすがかわいらしいですし……と、個人的にブースからの刺すような視線に耐えられなくなってきまし

たのでこれくらいにしておいてですね、何か悩みがあるのでしょうか」

「私、今ある男性と……その、デートっていうんでしょうか、してるんですけど」

「うわ、なんといううらやまし……もとい、幸せな男でしょう。今の発言によって後で私がシバかれることが確定した以外、何の問題もなさそうです」

「いいのかなって」

「え、何がですか」

「もともと私が、その人とどうしたらお話しできるかなって思ってた、その人の家だけにお仕事の募集という形でチラシを入れてみたんです。そうしたら来てくれて」

「なんともお嬢様っぽい考え方ですね」

「あ、もちろんその人とお話ししている間にこんないけないって考え直して、私の気持ちも伝えたんです。それでも、こたえてくれて」

「ほう、ますます何にも問題ないと思いますが」

「私のお願いはお話ししてくれることだけだったのに……いろいろしてくれるんです。手、にぎってくれたりとか、私が熱っぽくなった時も、額同士をくっつけて心配してくれたりとか、私ばかりが幸せでいいのかなって。何も返せていないのに」



「ノロけているようにしか見えません。更に問題ないと思うんですが」

「彼が何も望んでこないんです。最初は契約みたいなものから始まってますし……報酬っていうのも変ですけど、私が何をお返しすればいいかわからないんです」

「な、なんでしようこれ。お嬢様・健気・一途・純粹・鈍感のロイヤルフラッシュですか？ ……はは、あまりにまぶしすぎて自分でも何言ってるのかわからなくなりました。えっそうですね、薪口さん」

「はい……」

「今薪口さんが彼にしてくれたことを話してくれましたけど、あなただけではなく、おそらく彼もしたいと思ってやっていることですよ？ みんなその話を聞いたらそう言うと思いますが」

「そうなんでしょうか……でも、やっぱり」

「わかりました。それでも納得していただけないのなら、クリスマスだしこう言えばいいと思います。『今夜は私をプレゼントしたいの、どうか受け取ってください！』なんてね！」

「……………」

「え、えっと、誰か反応してくれる人はいないんですかね。ベタだしさすがにお前が言うのと引くわ、みたいな顔が並んでいて泣きそうなんですが」

「わ、わかりました。あの、やってみます」

「え！ あ、いや、薪口さん？ 今のはほんの冗談のつもりで」

「私がんばります！ 今までいろいろしてもらったので……今度は私の番なんですよね！」

「こ、これでよかったんでしょうか。なんだか私だけ、いろんな意味で損しかしていない気がします。というかこれ以上彼女が何をするのか考えただけでも身悶えしそうですが……薪口さんには私の身を削りまくったアドバイスをプレゼントしました、ううっ。

では、何度目かわからないですが気を取り直して……ほとんど自分に言い聞かせていますが、次の方お呼びしましょう。こんばんは」

「こんばんは……」

「ちょっと消極的っぽい女性ですが……名前と年齢を」

「あの、名前は伏せさせていただきます。高校二年生です」

「何をするにもいい時期ですね。でもここにいるということは何かお悩みですか」

「あの、わたし。一応彼氏持ちなんですけど」

「はい」

「アイツがずっと邪魔してくるんです。このままじゃ彼に会えないです……もうどうすればいいのか」

「おおっと……このクリスマスナイトショウ始まって以来の重たいテーマがついにきてしまったようです……それで、邪魔してくるヤツっていうのはどういう？」

「彼のことをまともに見られなくなるくらいにまで……きつと、わたしが汚い手を使っていたから……うう……」

「え、ちょ、泣かれてしまうと困ります！ あ、いや、どうしましよう？」

「ご、ごめんなさい！ 全部わたしがいけないんです。今さら薬を使ってもすぐには治らないのはわかっていますから……自業自得なんです」

「へ？ 薬？」

「目の上に……ものもらいが」

「……誰かいいい薬あったら彼女に渡しておいてください、はあ……」

「え？ え？ 何かわたし呆れられてしまうようなこと言ってしまったんでしょか……」

「いえ、気にしないでください……え、もうお別れの時間ですか？ なんだか今回はあまり充実感がないような気がします……気のせいなんでしょうか。いろんな意味でもう時間がないから締めろって……なんて無理矢理なんでしょう。わかりましたよ、では今夜のクリスマスナイトショウ、提供はフェアリードレス、DJは」

「みおみおと！」

「え……ここで入ってきていいのかな。る、るりるりが」

「「お送りしましたー!」」

「またそのまま終わられそうになるパターンかよ……」

「えへへ、これはお約束ってやつだよ？ あうあう、そんなにへこんじゃだめだよ……」

「ま、また来年お会いできたらお会いしましょう!」

「最後のセリフまで取られた……俺っていったい……では、またお会いしましょう。See You!」

### **ブロック3（後書き）**

ブロック3は、  
バレンタインに募集中（N8464J）  
気になるアイツ（N7264M）  
でお送りしました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3732p/>

---

クリスマスナイトショウ2010

2010年12月23日18時10分発行